

たった一人でヒーロー  
アカデミア

かいんせあ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公達の入学の前年、相澤 消太が全員除籍にしたクラスにもし偽物の博麗の巫女がいたら？

これはそんな物語。

# 目次

頁 1 2	頁 1 1	頁 1 0	頁 9	頁 8	頁 7	頁 6	頁 5	頁 4	頁 3	頁 2	頁 1
50	45	40	36	33	28	22	17	13	8	5	1



## 頁1

「相澤くんの嘘つきー！」

雄英高校ヒーロー科、1年A組の担任 相澤 消太。見た目からして怪しいがれつきとしたプロヒーローで、尚且つ教師でもある相澤は面倒な同僚に絡まれたことを恨みながら、背後の人物に話しかける。

「見てたんですね。暇なんですか？」

ヒーロー名、オールマイト。言わずと知れたNo.1ヒーローであり、相澤の雄英での同僚。

「合理的虚偽ってエイプリルフルは一週間前に終わってるぜ。君は去年の一年生1クラスで“一名を除き”全員除籍処分している。見込みゼロと判断すれば、迷わず切り捨てる。そんな男が前言撤回」

そこまで言うとおールマイトは人差し指をビシッと突き立てる。

「それってさ、君も“彼女の時と同じように”あの子に可能性を感じたからだろうか？」

相澤はため息を吐く。

「君も？随分と肩入れしているんですね先生としてどうなんですか？それは」

「可能性がゼロでは無かった。それだけです」

相澤は会話を打ち切り、オールマイトに背を向ける。

「見込みがなかったらいつでも切り捨てる。半端に夢を追わせるほど残酷なものはない」

「君なりの優しさって訳か、相澤くん。……でもやっぱ合わないんだよな」

去って行く相澤を見送りながら、オールマイトは矢張り彼とは馬が合わない、と苦笑する。

「あ、そうだ。折角だし久し振りに彼女に会いに行こうか。 博麗少女に！」

良い事を閃いた、とオールマイトは厳つい見た目に似合わない鼻歌を歌いながら、その場を去って行った。



「実は私は前世の記憶があります」

そんな事を言ったら、何人くらいの人々が信じてくれるのだろうか。

個性と呼ばれる超能力の様な力が当たり前となったこの世界でならば案外信じても

らえるのかもしれない。

だがもし私の前世の世界でそんな事をいったら病院を勧められるだろう。

私、いやこの肉体の本来の持ち主の名前は博麗 霊夢。

そしてその博麗 霊夢に憑依しているのが私こと、佐藤 優香。極々平凡な容姿に、名前の何処にでもいるOLだった…筈だ。何せ私は記憶が曖昧なのだ。そもそも博麗 霊夢というのは前世で私の親友がハマっていたゲームの主人公だ。確か妖怪の樂園、とかいう幻想郷という場所の神社の巫女さんだった。親友曰くそのゲームでは弾幕ゲームとやらがあちらしく、異変を起こす妖怪達を弾幕ゲームで退治して幻想郷の平和を維持するのが博麗 霊夢の役割らしい。

私が最初に前世の事を思い出したのは齡三歳の時だった。霊夢をそのまま大きくした感じのお母さんが私に「霊夢ちゃん！」と言った時に何かが起こったのか、私は前世を思い出した。成長して行くと徐々に記憶が戻ってきてはいるのだが、未だに分らないことは多い。最初はよくある転生かと思っていたが、そもそも私には死んだ記憶が無い。何故私はここにいるのだろうか。

私の目的はただ一つ。元の世界に戻ることに。

―それまでは…私は博麗 霊夢としてこの世界を、僕のヒーローアカデミアの世界を謳歌しよう。―

それがこの世界がある漫画の世界だと思いついて以来ずっと変わらない信念だ。



## 頁2

私の朝は早い。染み付いた習慣のお陰で日が昇ると同時に、勝手に起きてしまうのだ。

朝起きたらまずは冷たい水で顔を洗ってしまう。体は勝手に起きるが意識は勝手に覚醒してくれないのだ。

そして、神社の境内を掃除してから神社の周りをランニング。そこまで終えて漸く朝六時。そうしたら朝食の準備をしながら寝間着から制服に着替える。これでも現役高校生なのだ。

朝ご飯ができたらとつと食べてしまつて直ぐに家を出る。と、その前に：

「行つてきます、母さん」

二年前、私が中学三年生だった頃に母さんは亡くなった。元々プロヒーローだったが、私を産んでから引退して神社を継いだ母さんは、困っている人を見たら助けずにはられない質だった。ヴィランに襲われている少女を助けたところで致命傷を負い、病院に搬送されたけれど間もなく死亡。

悲しかったけれど何だかんだで私は立ち直れた。目下の目標は母さんを殺した挙句、

逃走したヴィランを取っ捕まえること。この世界を楽しみ尽くしてから元の世界に帰りたい、とは思っているがまずはヴィランを捕まえることが先だ。

### 閑話休題。

美しい微笑みを浮かべた母さんの写真に声を掛けた私は、教科書一式を突っ込んだ鞆を肩にかけ、母屋から飛び出す。

今日は雄英の始業式兼入学式。風の噂では今年もヒーロー科 一年A組の担任は相澤先生らしい。可哀想に、としか言いようがない。見込みが無ければ即除籍のあの人の授業は気が休まらない。事実去年のA組も私以外は一学期が終わる前に全員除籍処分を受けていた。：更にいうとB組の面々も恐れをなしてか全員自主退学していた。お陰様で私は去年一年間ほぼ全ての授業をポツチで受けていた。寂しかった。本当に寂しかった。

だがその悲しい現実も今年で終わり（かもしれないの）だ！

私は駅に向かって猛ダッシュしながら口元に笑みを浮かべる。ああ、嬉しい！嬉し過ぎて意識しなくても勝手に口角が上がってしまう。気を付けねば。

私の唯一の友人と呼べる存在によると私が心から笑っている時の顔は、完全に悪巧みしてる時の顔らしい。事実そのせいでご近所さんの幼稚園生に泣かれた。あれは傷付いた。ガラスのハートが砕け散るかと思った。

話が脱線してしまった。

なぜ今年で終わり（かもしれない）か。何でも今年の一年生は有望株が揃っているらしい。相澤先生に除籍されなかったら、私もヒーロー学などの実技教科ではその子達と授業を受けられるのだ！

長かったボツチ学園生活の終わり！喜ばないでいられる訳が無い。……実技科目以外は相変わらずボツチだが。私は辛い現実から目を背け、電車に飛び乗った。

## 頁3

「……」

「……」

沈黙が痛い。痛すぎる。

現在私がいるのはヒーロー科 二年A組の教室。本来なら二十人が使うための教室は、二人で使うには広過ぎる。だが私の苦悩はそんな事が原因ではない。

「……目のやり場に困るからまともな服着て？ あと……巨乳爆発しろ」

「ほ、法律には違反してないから！ っていうか酷いわね、貴方。嫉妬は醜いわ」うる

さっ」

18禁ヒーローとして名高い(?)プロヒーロー、ミッドナイトのコスチュームはこう……色々と目のやり場に困る。日本政府が態々『コスチュームの露出における規定法案』を制定するだけある。因みに彼女のファンはかなりの数いるらしい。勿論男性のみだが。

「噂じゃ極薄のタイツ着てるって聞いたけど……絶対嘘ついてるわよね」

「違うから！ いや本当に！」

「あつそ」

「貴方本当酷いわね！」

「というかこの人もう三十代の筈なのだが、もうちよつと自重しなさいよ、と言いたい。コスチュームは個人の自由なので別に何も言わないが。私も彼女程では無いが露出はあるし。」

「はあ、あの相澤が気に入ってた生徒って聞いたから絶対面倒な奴とは思ってたけど……」  
「気に入られてはいなかったわよ？」 というか寧ろ “一人に教えるために時間を割くとか非合理極まり無いから見込みが無かったらお前も即除籍にする” 位のこと言われたし」

「前から思ってたけどアイツもなかなか酷いわね!？」

ミッドナイトは良いリアクションをする。だがツツコミのしすぎで疲れてしまったようだ。肩で息をしている。

「良いリアクションね。お疲れ様」

「……もう何もツツコまないからね。はあ……知ってると思うけど一樣自己紹介しておくわ。香山 睡。ヒーロー名はミッドナイト。雄英高校の二年生A組、つまり貴方の担任よ。……まあ貴方以外に生徒いないけれどね。あ、近代ヒーロー美術史担当ね」

「じゃあ私もしようかしら。本名 博麗 霊夢。ヒーロー名は……考え中。漢字よりカタ

カナが良いんだけれど巫女だから良いのが浮かばないのよ。個性は『主に空を飛べる程度の能力』後霊力的なものも扱えるわ。得意科目は数学。　　こんなところかしらね」

「ふーん。ヒーロー名決まってるの？　　じゃあ一緒に考えてあげましょうか？」

どうやらミッドナイトは私と交流して仲を深めたらしい。意外とちゃんと教師をやろうとしているようだ。だが：

「今日はいいわ。多分もうそろそろ来るでしょうし」

「来るって誰が？」

「オー」「わーたーしーがー!!　　普通に窓から来た!!」

「普通に窓ってここ二階なんだけど？」

「お、お、オールマイイト!!?」

突如として窓から登場した人物を見て、ミッドナイトが異常に驚いているがそれも当然。

V字型の金髪に、筋骨隆々な鍛え上げられた肉体。そして何よりも：明らかに違う画風。誰もが知る人気No.1ヒーロー、オールマイイト。

「いやあ、久しぶりに君とランチできると思ったら、二階までジャンプするなんてなんてこと無いさ」

「それ聞きようによつては口説き文句になるからやめた方がいいわよ」

「HA HA HA!!君以外にはやらないさ!」

「そう、ならいいわ。とうかかなんでミッドナイトはそんなに驚いてるの? 同僚なんだから面識あるでしょう?」

今から約二年前の知り合った当初は、私のことをだいぶ警戒してる様子だったけれど何度か話すうちにだいぶ仲良くなれた。何故知り合ったかは…まあうん色々あった。

にしてもなんでミッドナイトはそんなにオールマイトの存在に驚いているのだろう。二人は同僚のはずだが。

「だ、だってあのオールマイトとなんでそんな仲よさげなの!?!」

「博麗少女とは色々あってね! あー香山クン、彼女を借りてもいいかな?」

「は、はい。大丈夫です」

「いやいや、ちよつと待て。」

「なんで私が了承してないのに勝手に決めてるのよ。誰も行くなんて言っていないわよ」  
「まあまあ、そう言わずに!!」

陽気に笑うオールマイトに私は溜息をつく。この人はやると決めたら一直線だ。仕方ない。

「…ランチ代は奢りで頼むわ。最近出費が激しい上に参拝客が減って賽銭が全然無いのよ。雄英に特待生制度が無かったら飢え死にしてるわ」

「こちから誘ったんだから当然奢ろう!!」

こうして今日のランチ代はオールマイトの奢りに決定した。よし、思いつ切り食べよう。

∴オールマイトが無駄にいい勘で私の思考を察したのか、顔を青くしていたのは余談である。



## 頁4

「あははといっひよなはひひほほはへへるっへひっへはへぼ「流石に何言ってるか分かるんないから飲み込んでからにして？」

口の中一杯に詰め込まれたまま話す私に、目の前に座る貧相な身なりの痩せた男が注意して来る。仕方がないじゃ無いか。皆んなが皆んなオールマイトみたいに稼いでるわけじゃないのだ。仕事振り次第で、国から金を貰えるヒーローの中でもトップヒーローのオールマイトは高級店の飯なんて食い慣れてるのだろうが、家の神社の家計は火の車なのだ。

「今失礼なこと考えたでしょ」

「歳をとるってやあね。被害妄想が激しくなるみたい」

口の中のローストビーフを無理矢理に飲み込んだ私は、真っ白なナプキンで口を拭いてから言葉を返す。これでもテーブルマナーは弁えている。…さつきは久し振りのローストビーフに興奮してがっついてしまっただけだ。

「にしてもオールマイトが態々こんな個室制の高級店に私を誘うなんて珍しいじゃない

の

「個室だからって堂々とオールマイトって言わないでくれよ」

今の会話から分かるように（誰が分かるのだ？）現在オールマイトは痩せこけた状態のトゥルーフォームだ。私がこの状態の彼と普通に会話しているのはこの世界の主人公達の記憶、所詮原作知識のお陰だ。彼と私の出会いについては割愛するが、私が最初からオールマイトのトゥルーフォームを知っていたのは個性のお陰ということになっている。巫女っぽいことは大抵できると伝えたら神託でも降りたのだと思ってくれたらしい。実際この世界に神がいるかどうかなど知らないが。

「気にしない、気にしない。で、用件は何？」

「…緑谷少年にワン・フォー・オールを渡した」

緑谷少年。オールマイトがそう呼ぶのはたった一人。緑谷 出久、彼だけだ。

興奮が抑えきれない。ローストビーフを眼前にした時よりも、だ。無個性でありながらトップヒーローに認められて個性を譲渡される。冴えない少年が最弱から平和の象徴へと成り上がる。なんとも少年漫画らしくて燃える展開だ。そんな主人公に会えると考えると喜びが抑えきれない。

しかも私は主人公達と一緒に実技科目を受けれるのだ。相澤先生が私以外の全員を除籍した所とか、去年二年生に見覚えのある三人組がいた時点で察していたが、私は主

人公の一個上だった！

本当は同い年が良かったが…欲張っても仕方ない。今の所はそれで満足しよう。

「この間話してた緑谷 出久？ 入学式で見なかったけれどまさか落ちたんじやないでしょうね」

「相澤クンが担任だからね…入学式もガイダンスも無視で最下位除籍のテストをしてたよ」

「ほんつと相変わらずね」

「変わらないよねえ、彼も。それでさ、緑谷少年まだ個性を使い熟せてなくて使うたびに怪我しちゃうんだよ。いやあ、もう少しで除籍だったからヒヤヒヤしたよ」

「随分リスクキーね。というか私を呼んだ要件その愚痴だけじゃないでしょうね」  
知ってる情報を知らないフリするのは面倒臭い。

そんなことで呼び出されたのならたまったもんじやない。私がギロリと睨むとオールマイトはあたふたし出す。…この姿週刊誌に売りつけたら結構売れそうだな。最もこの姿じゃ誰も信じてくれないだろうけど。

「そのだな…今度のヒーロー学の時間にこっちくるだろう？その時に緑谷少年にちよつと声を掛けてやって欲しいんだ」

どうやらオールマイトも緑谷 出久を心配しているらしい。師弟関係だから当然か。

正直その申し出は有難い。主人公と仲良くなつて損はないだろう。だが、心配なのはこの世界における異分子である私が、主人公に関わつて物語が変わつてしまわないか、ということだ。蝶の羽ばたき一つで嵐すら起きるのだ。私の所為で物語が変貌してしまつたら申し訳が無い。

なので今回は最低限度しか関わらないようにしよう。

「…考えとくわ。というか随分入れ込んでるみたいだけど、教師としてどうなの。それは？」

「ぐぬぬ…ていうか君と相澤くん似てるね!?!同じ事言つてるよ!」

「え…最悪。相澤先生と一緒に本当に最悪」

「そこまで嫌われていると逆に彼がかawaiiそうに思えてきたよ……」

何故か相澤先生に同情しているオールマイトを尻目に、私は肉汁たっぷりのハンバーグを口に運んだ。

## 頁5

「格好から入るってのも大事なことだぜ、少年少女!! 自覚するんだ!! 今日から自分は…ヒーローなのだ!! さあ、始めようか有精卵共!!!」

一斉に二十人のヒーローの卵が演習場に入ってくる。緑谷 出久は…あ、いたいた。確かあの兎みたいなのマスクはオールマイトの髪の毛のマネなんだっけ?

「いいじゃないか皆、カッコいいぜ!!」

そこには同意。特に轟 焦凍なんかはカッコいい。爆豪 勝己はカッコいいけど…どつちかかっていうとヴィランっぽい。歩き方とか含めて。目つきも怖いし、俺の前を歩いたから殺したただけだ。位言いそう。もうちよつとヒーローっぽくするべきだ。今は人気も無いとやってけないんだから。

「先生…ここは入試の演習場ですが、また市街地訓練を行うのでしょうか!？」

ガシヤン、という効果音を立てて見た目ガンダムな飯田 天哉が拳手する。なんか動きにくそうだけど、小学生男子に人気でそうなコスチュームだ。経営科が目を付ける予感がする。

「いいや！ もう二歩先に踏み込む。屋内での対人訓練さ!!」

屋内での対人訓練…嫌な思い出しが無い。去年は初っ端のこの訓練で一気に三人が除籍されていた。というかあれは普通に怖かった。いや、だっていきなり隣で一緒に戦って奴が「はい、除籍」されるとか普通に怖い。今年はオールマイトの授業だから大丈夫だろうけど…。

「いいかい!? 状況設定は敵がアジトに核兵器を隠していて、ヒーローはそれを処理しようとしている。ヒーローは制限時間以内に敵を捕まえるか、核兵器を回収すること。敵は制限時間までにヒーローを捕まえるか、核兵器を守ること」

いつの間にか話が進んでいたようで、オールマイトは紙を見ながら状況設定を言っている。それにしても…

「設定アメリカンね。貴方の趣味?」

思わずツツコンでしまった。二十人の視線が私に向く。

「なんか校長に渡されたんだよね」

「へえ、あのリスだか犬だかよく分かんない校長、アメリカンな設定好きなんだ」

「…君校長のこと嫌いな?」

「全く。というか興味ない」

「君たまに毒舌なことあるよね」

「先生！ その方は誰ですか？」

オールマイトと会話していると、痺れを切らしたのか飯田 天哉は質問してくる。因みに今の私は巫女服だ。最も普通の巫女服ではなく、肩が空いている博麗 霊夢の赤い巫女服だが。これが私のコスチューム。本当は体育着が良かったのだが私も戦わされるらしいので巫女服で来た。

「彼女は「自分で紹介するから黙ってて」

「私は博麗 霊夢。貴方達の一つ上の二年A組よ。ここに居るのは貴方達の担任が去年私を除き、一クラス全員

除籍しやがったから。因みにB組の面々はその時に恐れをなしたのか、全員が自主退学しちゃってね。だから二年のヒーロー科は私しかいないのよ。年も近いし宜しくね」余計なことを言われたくないのでオールマイトの言葉を遮ると、ヒーローの卵達は目を見開く。あのオールマイトにこんな風に話す人なんて中々いないから驚いているのだろう。

「彼女には君たちの戦闘訓練が終わった後に私と戦ってもらおう。ついでにいうと彼女は既にプロヒーローと遜色がないくらい腕前だから色々学ぶといい！」

「ちよつと待ちなさいよ。私がプロ並みの腕前であるのは事実だからいいとして、なんで貴方と戦う事になってるの？」

客観的に見ても、私はプロ並みの実力は擁している。これは事実だ。何せ博麗 霊夢の程度の能力は妖怪揃いの幻想郷で最強と呼べるものだ。その上勘もいい。これでプロ並の実力が無かつたらこの世界はどんだけ化け物揃いなのだ、という話だ。

だがまあ一年生達には信じられないようで、私を凝視してくる。

「だつて君暇だろ？」

「…仕方ないわね」

「H A H A H A！ じゃあコンビ及び対戦相手を決めるクジをしようか！」

その後は記憶通り。緑谷 出久は爆豪 勝己と戦い、勝利はしたが大怪我を負い医務室に運ばれていった。

試合はどんどん進んでいき、あっという間に最終グループまでが終了する。

「じゃあ博麗少女！ 私たちもやろうか!!」

「はあ、面倒くさい。私がヴィラン側でいい？」

「じゃあ私がヒーロー側をやろう！ 君たちはモニタールームで見ててくれ!!」

核兵器を置く位置は自由らしい…ならば。

「一階以外あり得ないわね」

敢えて入り口に一番近い部屋の中に核兵器を置いた私は、二階へ上がる階段部分で待機する。オールナイトならば、私が核兵器を置くのは最上階と考える筈。二階に上がる



階段はここしかない以上、それこそジャンプで上の階に行かなければ必ずここを通る。入り口から階段までは、一度曲がればあとは一直線だ。その一直線部分で弾幕を放つのがパーフェクトだろう。制限時間まで逃げ回るのはオールマイト相手には不利。ならば私の得意な中距離からの狙い撃ちがベストだ。

屋内対人戦闘訓練 スタート!!

私はいつでも弾幕を放てるようにお祓い棒を構えて、オールマイトを待つ。

一回だけオールマイトと戦ったことがある。あの時は完膚なきまでに負けた。だが  
今回は…

「絶対に勝つ」

## 頁6

訓練開始から10秒も経たない内に、オールマイトは私の待つ踊り場へとやって来た。私は警戒を緩めずに話し掛ける。

「ほんつと馬鹿げたスピードね」

「私にとつては褒め言葉だ!」

瞬間私の右斜め後ろの階段の一部が、オールマイトの放った拳の風圧によって凹む。風圧で金属が凹むって意味が分かんないんだけど…。つていうか

「今本気でやったでしょ!?! 私がスレスレで避けてなかったら死んでたわよ」

「ちゃんと避けてたじゃないか!」

さも当然、のように言っているが私の本領は中距離。近距離戦闘は苦手分野だ。今だつてギリギリ目で追えたから避けられたけれど…次は危ないかもしれない。そもそも学生に何本気でやってるんだ。

「今度はこつちからいくわよ」

私はお祓い棒からオールマイトに向けて赤色の弾幕を放って行く。ランダムでゆらゆら動く様になっているから、オールマイトでも中々抜けられないはず。オールマイト

は避けるために少し後ろに下がった。今のタイミングでスペルカードを出してしまおう。

「夢符『二重結界』」

スペルカード、博麗 霊夢ら幻想郷の住人達のゲームで切り札として使われるお札であり、自らの得意技を発動するもの。

その一つが今私がカード宣言した『二重結界』

私がお祓い棒を振るうと、私を中心にオールマイトを囲む様になっていく。四角形の結界が形成される。これだけではただ囲んで行動を阻害することができる程度だろう。だが……主人公の弾幕はそう易々と突破できるものではないのだ。

突如として出現した結界に驚きながらも攻略法を探そうとしているオールマイトに、追い討ちをかけるように私は、別途袖からお札をばら撒く。ばら撒いたお札は霊力によって操られ、波打つ様に揺れながら私の周りを漂っていく。

「流石、といったところだね！」

「まだまだ避けてるじゃないの」

「いやあ、もう三回も被弾してしまつたよ！」

オールマイトの動体視力は異常な程高い。だが、ただ高いだけでは何にもならない。オールマイトの身体能力があるからこそ、彼は不得意な狭い屋内で更に結界によって大

きな行動ができなくても、弾幕を避け続けているのだ。だが流石の彼も完全に避け切ることはできなかつたようだ。最も……

「三回も当たってまだ意識あるのが異常よ。妖怪の類かしら?」

「私は真人間さ! 寧ろそんな大量のお札を操りながら結界を張れる君こそ妖怪の類じゃないかい!」

「あら失礼ね。私は只の巫女よ。博麗の、が付くけれど」

並の人間じゃ一回目の被弾で意識を失う。やっぱり最強と言われているだけはある。

だが……この勝負が屋内である、というのが勝負の分かれ目。私も本来はどちらかというと屋外、それも被害を考えなくていい何もないところの方が得意だが、このスペルカードは屋内向きだ。

何故か?

私から放たれた大量のお札は壁に跳ね返って返ってくるのだ。そろそろ第一陣の御到着。

「むっ!? これもしかしくなくても跳ね返ってきた奴にも当たつちやダメなのかい?」

「そりやそうよ」

オールマイトはやつと気付いたらしい。後ろに警戒しているが、もう遅い。私はオールマイトの意識が背後から襲い来るお札に集中している間に、袖から出すお札の数を増

やす。

「うわっ！ちよつとこの数を避け切るのはキツイかな？」

「じゃあとつとと降参するのを推奨す「まあ大丈夫だけどね!!」

勝利を確信した次の瞬間、私は目を大きく見開く。オールマイトは…地面に拳を叩きつけて、その風圧でお札を全て弾き飛ばしていた。霊力で操っているから本来そんな事は不可能の筈なのだが…

「ほんつと常識外れね、貴方つて」

「私は君に言いたいよ！ここまで追い詰められたのなんか人生で二回目さー」

「余裕じゃないの」

「正直風圧でこのお札が弾き飛ばせるから確信なかったんだよね」

またお札を避ける様になったオールマイトは頭をかきながら笑っている。余裕たっぷりな様に私はため息をつく。恐らく今の私では六割を出さねば勝てないだろう。六割を出さなくても他にもスペルカードはあるから勝敗は五分五分だろうが…

「今日のところは降参よ」

「え？」

私は霊力を霧散させ、効力を失ったお札を自分のところに一気に集める。このお札は自家製なのだ。祝言的な何かが書かれたお札に霊力を込めているだけの代物だが、結構

制作時間かかるので一々回収しないといけない。私は集めたお札を再び袖の内側にしまい込み、お祓い棒を地面に落としてから手を挙げる。

お祓い棒が私の手を離れると同時に、結界もまた消失する。

「その何だっけ…スペルカードだっけ？ まだあるんじゃないのかい」

オールマイトは拍子抜け、といった感じで私に訊ねてくる。確かにまだスペルカードはある。しかしこの勝負においてスペルカードを二枚使うのは私の決めたルールに反してしまう。

「実戦じゃない限り、スペルカードを使うのは一枚まで。これが私のルール」

弾幕ごっこにおいてスペルカードは予め決めた枚数を使っても相手を倒さなければ敗北だ。私の戦闘は弾幕ごっこに則って行われる。ならばそのルールも守るべきだろう。…流石に人の命がかかった実戦ではそんなこと無視するが。

「ふむふむ。だが折角の訓練だ。全力でやらないかい？」

「それは駄目。それをすると私が暇なだけだから。全力でやるのは…そうねオールマイトが四人に増えた時だけね」

「そいつは残念だ…」

シヨンボリするオールマイトは少し笑えた。四人が増える、といったのはとある吸血鬼が頭に浮かんだから言っただけであって本当とはいっていない。全力は無理でも

オールマイトが現役引退する前には七割くらいで一度戦ってみたいものだ。

こうして私の戦闘訓練は終了した。因みにモニタールームでは怯えた視線を向けられた。普通に傷付いた。私のハートは割れやすいガラス製なのだ。∴当然といたら当然か。オールマイト相手に善戦したんだから。

# 頁7

「君、平和の象徴 オールマイトの授業はどんな感じ!? 一言お願い!」

一言で言おう。邪魔どけウザい。

こっちはマスコミに対応するために学校きてんじやないんだ。人の迷惑になるってことを考えろ。

オールマイトが教師になる、という情報はマスコミにとって格好のネタ。最近はずいぶん雄英の校門前に押し寄せてきている。正直ぶっ飛ばしたいが、私はヒーロー志望だ。流石に民間人に手を出すのはタブー。…どんなに邪魔臭くても、だ。

「邪魔、どいて。大人なんだから人の迷惑にならないようにやって。精神年齢5歳なの、貴方?」

「はあ!?! 貴方!?!」

なんか後ろで騒いでるけど知ったこっちゃやない。勝手に騒げ。

私は振り返らず、そのまま教室へ向かった。





「ねえ、霊夢？」

「そんな物欲しそうな目をした所で絶対にあげないから。後、霊夢とか馴れ馴れしく呼ばないで」

「外道、悪魔、鬼巫女！」

「鬼巫女ですが何か？」

上目遣いでこっちちを見てくるミッドナイトを適当にあしらうと、目の縁に涙を浮かばせる。

「お弁当忘れたのお」

「あつそ」

「もうやだこの子!!」

現在時刻12時半。お腹空いているのは分かるが…

「そもそもなんで私の弁当欲しいの？」

雄英にはちゃんと食堂がある。安くて美味しいから人気の筈だ。私が朝適当に作ってる弁当なんて精々コンビニ弁当程度なのだからそちらに行けばいいじゃないか。

そんな私の疑問はすぐに解決する。

「…財布忘れた」

「馬鹿なの?」

財布忘れたとか馬鹿なの?

私が呆れていると、校舎内の随所に設置されているスピーカーから、警報音が鳴り響く。

「な、何事!?!」

『セキユリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに避難して下さい』

セキユリティ1が突破…つまりこれは…。確かマスコミが雄英内部に入り込む事件だ。黒幕はヴィラン連合。

そしてこの事件があつたからUSJ編で襲撃されるはず。となると下手に動いて物語の流れを破壊するわけには行かない。だが…今朝の件もあつて彼奴らマスコミにはイラついている。

「博麗、取り敢えず貴方は避難し…って博麗!?!」

私は適当に開いていた窓から一階に飛び降りる。勿論地面に着地する瞬間に個性は発動した。空を飛ぶ程度の能力は地味に便利だ。ミッドナイトは指示を聞かない私に慌てているようだが、所詮相手はマスコミ。私のストレス発散してもらうだけだ。

校門の方に行くと、相澤先生とプレゼント・マイクがマスコミに対応しているのが分かる。

「オールマイトを出して下さい!!」

「彼は今日非番です」

「一言でいいですから!!」

「一言つていうと二言欲しがるのがあんたらだ」

「誰ですか、あなた。つてか小汚っ」

…まあ見た目小汚いよね。相澤先生。

「相澤先生、侵入者つてこいつらのこと?」

「なんでお前がこ「君、雄英の生徒!」 オールマイトが教壇に立っていることについて一

言ー」

「こつちにもお願い!!」

相澤先生に声をかけると、こつちに気付いたらしいマスコミが一齐にやって来る。

「ねえ、不法侵入よ。これ。痛い目会いたくないならとつと出てつて。警告は一回きりだから」

「一言貰えたらすぐ帰るから!お願い!!」

私は嘘は基本的にはつかない。警告は一度つきりだ。

「そう。じゃあ…目が覚めたら警察かもしれないけど覚悟してね」

「おい、博麗!そこまでにしとけ!」

「警告を無視する奴らが悪い。結界『パパラッチ撃退結界』」

相澤先生の制止を無視して、私は靈力を練って弾幕を出現させる。

青白いリング弾と赤いお札が私を中心に回転しながら、発射される。全方向弾幕だがパパラッチ専用の弾幕は相澤先生とプレゼント・マイクのことは綺麗に避けて、マスコミに命中する。これは当たっても数分後には目覚めるようになっていたので、比較的安全だ。

弾幕が全て消え失せる頃には、その場に立っているのは私と教員2名だけになっていた。

「…よくやった、と言いたいが博麗、お前後で反省文な」

「ストレス解消できたしやってあげるわ」

「なんで怒られる立場のお前がそんな偉そうなんだよ」

こうしてマスコミ事件は無事解決した。が、その騒ぎの中でカリキュラムがヴィラン連合の知るところになったということは私以外はまだ誰も知らない。

## 頁8

ヴィラン連合の一回目の襲撃。それが今日だ。

少しずつ薄れてきている臆気な記憶が正しいのなら、ヴィラン連合はオールマイト平和の象徴を殺す為に一年A組の救助活動の授業中に乱入。彼らの予想以上に教師、生徒の力があつたことにより怪我人はいたが犠牲者はゼロ。異常を察したオールマイトとプロヒーロー達の到着によって撤退を余儀なくされる。

物語の流れが大きく変わるのが嫌な私としては、正直な話あまり関わる必要性は無い。13号や相澤先生は大怪我を負うはずだが英雄の屋台骨であるリカバリーガールのお陰で大きな後遺症が残ることも無い。

結論として私は関わらず静かにしているのが一番なのだが：勿論そんな事をするわけがない。

私は博麗 霊夢としてこの世界を思う存分楽しみたいのだ。オールマイトでも数百年の攻撃を入れねば倒せなかった敵、脳無。：なんて面白そうなのだ！

実は私は全力で戦ったことがない。それこそ小さい頃に母さんと勝負した時くらいだ。：最もあの時は相手を加減してもらっていたお遊びレベルだが。最近で一番頑

張ったのは二年前、初めてオールマイトと会った時に六割で戦った時。この間戦った時はスペルカード一枚使っただけだしいい運動になった、程度だ。

何故私が全力を出してオールマイトを倒さないか、それは全力を出したら加減ができないからだ。勿論本当の切り札を使ったら暇なだけなのでそこは考えないとしても、華麗 霊夢の本気は人間にはキツイだろう。

だが脳無なら？

オールマイトをも手こずらせたショック吸収に、圧倒的な自己再生。私が本気を出してもギリギリ生き延びてくれるのでは無いだろうか？

オールマイトが脳無を倒せたのは圧倒的なスピードと攻撃力あつてこそ。私の場合、火力ならオールマイトより上だがスピードならば遥かに及ばない。

要は私は本気を出した上で負けたのだ。

いつの間にか私は向上心というものを忘れてしまった。人間は負けて悔しい、と思うことで成長する。成長を止めてしまった人間は朽ちゆくだけだ。まあ言ってしまうと少年漫画らしい敗北↓努力↓勝利をやってみたいというだけのことだ。

と、いうことで私は現在ヴィラン襲撃事件の第一回目の現場となるUSJに来てい  
る。災害救助訓練は一年生だけでなく二、三年生もやらされる。どうせボッチでやるよ

りは、とミッドナイトに言ったら案外すんなり許可が下りた。因みにその時々々雑用を押し付けられた。委員長なんだからヨロシク、とかなんとか言っていたが私以外ないから強制的に委員長にさせられるのは酷いと思う。しかもポツチだから誰かを率いる統率能力を鍛えられる、という委員長の唯一の良いところすらないのだ。本当に相澤先生を恨む。

除籍処分も嫌だったが一人だけ残されるのこっちの身にもなつてくれ。

暇だったので心の中で色々愚痴っていると、一年A組を乗せたバスがUSJの敷地内に入ってくる。私は入口の方に移動して13号と一緒に彼らの到着を待つことにした。バスからコスチュームを着た生徒たちが次々に下りてくる。一番最後に下りてきた相澤先生はいつも通り小汚かった。

— 面白いえば相澤先生は脳無に負けて大怪我をするんだった。じゃあ私が脳無をぶつ飛ばしたら物語が変わってしまうのだろうか？

……ま、いつか。主人公達なら兎も角相澤先生なら大丈夫だろう。多分…。

私は余計な考えを頭から追い出して、脳無にぶつけるスペルカードを考えていることにした。

## 頁9

「うわっー！何だコレ！！ USJかよ?」

USJ（偽?）の敷地内に入ってきた生徒の第一声である。それに対する答えは当然「水難・土砂災害・火事：etc.」ここはあらゆる事故や災害を想定し、作られた演習場です。その名も：嘘<sup>U</sup>の災害や事故<sup>S</sup>ルーム!!」

…ここは色んな意味で衝撃的だった場面だからハッキリ覚えていたが、どうしてもツツコミたくなる。

無理やり過ぎるだろ。まあ無理矢理にでもUSJに持ってきた精神は凄いなと思うが。因みに私以外に同じ事を思う人はいるらしく、一年生の何人かはその顔に苦笑を浮かべている。

にしてもこんな豪華な設備に、本校舎の雄英バリア。一体どれだけの金がかかっているのだろうか。間違いなく生徒が払う学費だけでは不可能だ。日本の未来を担う精鋭達を教育する最高峰の学び舎とはいえ、国がそこまで援助してくれるとは考え難い。おそらく雄英は元生徒からの寄付で成り立っているのだろう。支出は激しいが、それ以上に働きに応じて国家から報酬が支払われるプロヒーロー。大成したヒーローの総資産



はとんでもないことになる」と聞いたことがある。だがそこまで成功したヒーローは大抵忙しくて金を使う暇が無いのだ。結果、有り余る金は寄付という使い方をされる。

ああ、そのお金の十分の一でいいからうちの神社にくれないだろうか？

神社を綺麗に改装して毎日豪華なご飯を食べる自分を妄想していると、13号が話をしだす。

「えー 始める前にお小言を一つ…二つ…三つ…四つ」

「ご存知の方もいると思いますが、僕の個性はブラックホール。どんなものでも吸い込んでチリにしています」

目立つ個性が多い昨今では地味と思われるような個性だが、ブラックホールは利便性が高い上に攻撃能力もあるかなりのアタリ個性だ。どんなものでも吸い込んでしまえる、というのには普通に強い。個性とは使う人次第ではあるが、この個性は素人が使ったとしても十分に強いだろう。：最も使い熟せずに自分が吸い込まれそうだが。

「この個性で災害から人を救いあげているんですよね！」

麗日 お茶子が嬉しそうに言う。彼女は13号のファンだった筈だ。かくいう私も割と好きだ。最近には派手にヴィランを倒す戦闘タイプのヒーローが人気だが、彼の様な災害救助などを主とするヒーローもまたカッコいいものだ。

「ええ。ですがこの個性は、簡単に人を殺せる力です。みんなの中にもそういう個性がいるでしょう?」

簡単に人を殺せる個性：私も含めてこの空間には結構いるな。頷く者、ジツと13号を見据える者、微かに顔を青くする者。反応はそれぞれだがみんな自分の個性の危険度は理解している様で、先程までふざけていた者も真面目に話を聞いている。素直なのはいいことだ。

「超人社会は個性の使用を資格制にし、厳しく規制することで一見成り立っているようには見えません。しかし一歩間違えば容易に人を殺せるいきすぎた個性を個々が持っていることを決して忘れないでください。相澤さんの体力テストで自身の力が秘めている可能性を知り、オールマイトの対人戦闘訓練でそれを人に向ける危うさを体験したと思います。この授業では心機一転！人命のために個性をどう活用するのかを学んでいきましょう！君たちの力は人を傷つけるためにあるのではない。助けるためにあるのだと心得て帰ってくださいね。」

去年も似た様なことは言っていたが、矢張り13号の言葉には説得力がある。実際に人に向けるには危険すぎる個性を持ちながらも、人の命を救う活動をしている張本人に言われると心に染みる。

「以上、(´▽`)静聴ありがとうございました」

そう言つて13号がぺこりと頭を下げると。皆彼に向かつて拍手を送る。

数秒経つて拍手がおさまると、相澤先生が訓練を開始しようとする。が、残念ながらそれは突如として中央広場に現れた黒い霧によつて阻まれる。

13号が人命救助について語つてくれたこのタイミングで来るとは……何とも嫌な奴らである。

黒い霧の中から、異様な雰囲気を纏つた男が出て来る。死柄木 弔。

それに続いて、霧の中から次々にヴィランが現れていく。

生徒の多くはまだ気付いていない、或いはこれも何かの余興と思つている様だがいち早く危険を察知した相澤先生は警告を発する。

「一塊になつて動くな！ あれはヴィランだ！」

流石は倍率300倍を超えた者達、なのだろうか。相澤先生の警告に殆どの生徒は一瞬で警戒体制になり、いつでも攻撃をできる様に、個性を使える様にする。勿論私はいちが出現した時点からお祓い棒を構えている。

殺せるものなら殺つてみる。私はヴィラン達を睨み付けた。

## 頁10

「はあ……どこだよオールマイト。折角こんな大勢連れてきたのにさ……子供を殺せば来んのかな？」

私の知っている通りの死柄木の言葉。

一年生がその言葉に慄くなか、私はどこか安心した。私という異分子がいるのだ。ストリー上大切なイベントである最初のヴィラン連合の襲撃で他にも異分子があったら……本来の物語から大きくズレてしまうのは確定だろう。

「ヴィラン!? バカだろ!? ヒーローの学校に入り込んでくるなんてアホすぎるぞ!」

「センサーが反応してねえのなら向こうにそういう事が出来る個性がいるって事だ。馬鹿だが阿呆じゃねえ。これは何らかの目的があつて用意周到に画策された奇襲だ」

轟 焦凍。本当に優秀なヒーローの卵だ。この短時間、しかも初めての实战でそこまです推測できるのは幼い頃からの訓練の賜物だろう。

「13号避難開始! 学校に連絡させ! センサー対策も頭にあるヴィランだ。電波系の個性が妨害している可能性もある。上鳴、お前も個性で連絡させ。それと……博麗!」

思わずギクリとしてしまう。何故私?

これは本来ならあり得ない言葉だ。相澤先生が私に指示する数秒で何かが変わってしまうかもしれない。

「救難信号代わりに弾幕打ち上げとけ。後そいつらをー」

言いながら相澤先生は顎で狼狽えている（一部例外アリ あの子達冷静すぎやしないかしら？） 一年生達を示す。

「避難させろ。そこらのヴィランに負けることは無いだろ？」

「馬鹿にしてるの？ そこらのと言わずにその頭イっちゃってそうな奴の相手あげようかしら」

「お前なら勝ちそうで怖いが今はそいつらの避難をさせとけ」

どうやら私は13号と一緒に一年生の避難をさせねばならないらしい。にしても：どうしようか。確か13号は早々にダウンして生徒は黒霧に飛ばされる、っていうのは覚えているけど私が避難させたらその流れは崩れてしまう。後ついでに言うとは私は脳無の相手をしたから避難係はお断りだ。

上手くここに残る理由を考えるが、中々思い付かない。まあ仕方ないから取り敢えず指示の片方は果たそうとお祓い棒も上に向けるが：その暇はなさそうだ。

いつの間にか相澤先生は戦いを始めてるし、爆豪 勝己は黒霧に殴りかかろうとしている。

「危ない危ない。生徒といえど優秀な金の卵。散らして、捌り、殺す」

二方向からの攻撃に、一瞬消え再び姿を表す黒霧。13号は二人に下がるよう言うが、少しばかり遅かった。黒霧は靄を辺りに展開させる。必死にそれを吸い込もうとする13号の努力虚しく、あつという間に辺りに広がった靄は生徒達の大部分を包み込んだ。

「皆！」

そして次の瞬間には生徒達は転移させられる。残ったのは私と13号、飯田 天哉のみ。

「飯「さてさて、では13号。あなたにも消えてもらおうとしましょうか」

飯田 天哉にプロヒーローを呼んでくるよう指示しようとした13号の言葉は黒霧に遮られる。13号はプロヒーローとしては比較的戦闘経験が少ないヒーロー。黒霧には勝てない。…さて、私もそろそろ参加するのでしょうか。黒霧の方は殺さない程度にやれば、いや軽く気絶させれば問題ないだろう。殺さない程度といって重傷を負わしてしまつたら物語が変わってしまう。

「その黒つばいの、ちよつといい？」

「黒つばいのは失敬な。私、黒霧と申します」

「うんでさ黒つばい人さ…ちよつと邪魔」

「は?」

名乗ってるが煽る為にあえて無視だ。こういうのは煽ってなんぼ。

少し苛立つた様子の黒霧に向かって、私はノーモーションで封魔針を投擲する。どこから出したかって? そりゃあお馴染みの別途袖の中からですよ。袖口広いから取り出しやすいし、たくさん入って便利!

とまあ、そんなことはどうでもよく封魔針は黒霧に突き刺さる。そして勢いそのままに地面にまで刺さった。要は黒霧を地面に縫い付けたわけだ。

「っな!」

「暫くは動けないと思うわよ。じゃあそこであんたらの秘密兵器が倒されるのみてなき  
い」

怪我をさせないよう、敵に刺さる瞬間にだけ実体を無くしているのであんな芸当ができるのだ。暫くはあれで地面から離れられないはず。因みにあの針は時間経過で消える。ちゃんと逃げられるようにしてあげているのだ。

「飯田 天哉、だっけ? 雄英に異常事態が起きてるっていつてプロヒーロー連れてきて」

「は、はいっ!」

「…元気が良くてよろしい」

彼に雄英に行ってもらわないとヴィラン連合が帰ってくれないので、プロヒーローを呼んでくるよう指示を出す。返事の仕方といい何といい本当に優等生といった感じだ。

彼が出口に向かったことを確認した私は、13号の様子を見る。ワープゲートで攻撃されていたらしいが：大丈夫そうだ。小さな切り傷とかは沢山あるけど他は大した怪我は無い。ただ気絶しているらしい。まあある意味では好都合だ。

13号を確認した私は相澤先生の方を見る。

ゴーグルで個性を使用先を見られないようにして、大勢と戦うなんて優れた技術だ。性格には難ありだがヒーローとしては非常に完成されている。

まだ脳無は登場していないらしく、ヴィラン相手に無双している。チンピラとはいえ流石だ。

と、ここで死柄木に動きが見える。そろそろ脳無が動き出すのだろう。傍観をやめた私は脳無と戦う為、相澤先生の方に向かうことにした。



## 頁 11

対平和の象徴 脳無。

非人道的な実験によって生み出された複数の個性を持つ怪物。

原作ではあのオールマイトをも苦戦させる力を持っていた強敵だった。

油断などしていない…筈だった。いや、よく考えれば私は慢心していたのだろう。本気を出せばオールマイトも倒せる私が脳無に負けるわけがない。むしろストレス発散になってもらおう、とすら考えていた。

…だが私と脳無では相性が悪かった。いざ脳無と戦ってみると、被弾を恐れない脳無は私の弾幕を避けようとする意志さえみせず、最短ルートで私へと向かい結界を突破した。結界がいかに強固であろうと脳無の力は異常だ。オールマイトと違い怪我を恐れないが故にとれる強行突破。

もう私と脳無の距離は数メートル。ここまで近寄られてしまったら……

「博麗!」

驚いた様な相澤先生の声をBGMに脳無の拳が迫り来る。アレが直撃したら即死だろう。迫り来る死を前に世界がスローになる。不意に脳裏に亡き母との思い出が浮か

ぶ。

嗚呼、これが走馬灯なのだろうか？

「霊夢さん!!!」

緑谷 出久の声も聞こえた。悲鳴も聞こえた気がする。数秒後には私がミンチになつていてと思つたのだろう。

にしても……

「これもう飽きた」

「……へ？」

外野が阿呆面晒しているのを見物しながら、私は辺りを見渡す。いつの間にか結構人数が揃っている。この分だと直ぐにオールマイトが来るだろう。ならばその前に脳無でストレス発散しなければ。

ふと自分の体を見ると、私の体は“半透明”になっている。これを見るのも本当に久しぶりだ。

「え？……なんで透けてんの？」

「…アイツほんと何なんだよ」

「れ、霊夢さんがミンチになつてない!？」

相澤先生、私は人間ね。博麗 霊夢はスペックは化け物じみてるけど人間だから。妖

怪でも化け物でも無いから。博麗の巫女は人間辞めてるけど私は人間だから。

それと緑谷 出久は勝手にミンチにするな。というか美少女が化け物にミンチにされるシーンとか誰得だ？

色んなところにツッコミ入っていると脳無が再び私に向かつて拳を振るってきた。まあ当然今の状態の私にそんな攻撃が当たるはずも無く、風圧で地面にクレーターが出来るだけだ。…クレーターが出来るだけってよく考えると可笑しい件。

「そういうえば宣言するの忘れてたわね…。『夢想天生』」

スペルカード宣言と同時に私は目を瞑り脱力する。目を瞑っているからわからないが、恐らく私の周りには本来のスペルカードと同じように八つの陰陽玉が並んでお札をばら撒いてくれているのだろう。

夢想天生、弾幕勝負において博麗 霊夢が最強と言われる所以…らしい。結局の所私の知識は全て親友の受け売りだ。

きつかり三十秒後に目を開けると、目の前にいたのは呆然とするヴィラン連合と地に伏して動かない脳無だった。微妙にシユールな絵面だ。というか後ろからの視線が凄いんだが。これは十中八九相澤先生だろう。あの人ドライアイのはずなんだがなあ…。「うーん…まあいいストレス解消になっ「もう大丈夫。私が来…ってえ？もう終わってるのこれ？」」

「オールマ」そこ五月蠅い。というかオールマイト遅い。まあその改造人間さんと楽しく戯れてただけだからいいけど」

大きく伸びをしながら言った言葉は例の如く、突如乱入してきたオールマイトに遮られる。いい加減これにも慣れてきたので：私も憎悪を込めた死柄木の言葉を遮る。うわあ殺気凄い。

「ヴィラン連合：だっけ？ もう今日は疲れたから帰って。もうゲームオーバーでしょ？」

「……チツ。次はお前も殺す」

「死柄木、今日はもう行きましよう」

捨て台詞を吐くだけ吐いて、ヴィラン連合は黒霧のワープゲートをくぐって逃げていく。さりげなく脳無も回収しているが今回は見逃してあげよう。

「あ、ちよつ。待て！」

少し遅れて状況把握をしたらしいオールマイトが追いかけてくるとしてはいるがもう無理だろう。

「残念。もう無理ね」

「なんで君は残念と言いながらそんな嬉しそうに笑ってるんだい？」

「そりゃあ：負け犬の遠吠えって聞いてて楽しいでしょ？」

オールマイト含むヒーローの卵達がドン引きしている気がする。敵の捨て台詞聞いてると勝ったって実感できるから好きなのに何故そんなに引かれなきやいけないんだ。

結果、USJ事件は私と一年A組の間の溝が更に深まる形で終了した。なんで仲良くなりたいの引かれるのだろうか…。

因みに相澤先生にはあんな技があるなら最初から使えと言われた。夢想天生は正直今回はちよつとだけ生命の危機を感じたからやっただけで消耗が激しいから普段は使いたくない、と言いつしたがアレは絶対信じてくれない。実際のところ夢想天生、疲れはするがそこまでのものでは無い。私があれば使わないのはあれを使うと完全な蹂躪になってしまうからにほかならないのだ。

## 頁12

「あ、博麗！　なんか相当暴れたらしいじゃないの〜」

「暴れたって程は暴れてないわよ。脳味噌の無い怪物と戯れただけ」

「それはだけって言わないから」

USJ事件の影響でできた臨時休校から一夜明け、私は欠伸を噛み殺しながら机に突っ伏していた。

今はHRの筈なのだが、大抵の場合この十五分間は私とミッドナイトの雑談で終了する。雑談といっても向こうが喋ってるだけだが。

「そういえばさ、私って体育祭出場するの？」

「いや…あなたしかヒーロー科いないんだからあなたが出なきゃお話にならないでしょ」

「別に普通科もいるじゃない。私その日ちよつと外せない用事があるからNGね」

雄英の体育祭はソコソコに面白いが、今年はそれよりも優先しなければならぬ用事があるのだ。

「え、ちよつ、せめて用事のn」家庭の事情」

次の瞬間チャイムが鳴る。ミッドナイトは絶対来てもらうからね、と言いながら足早に教室を出て行つた。



空は見事なまでの快晴。絶好の体育祭日和の中、私は雄英に向かう電車とは反対方面の電車に乗っていた。

向かう場所は割と田舎だが、博麗神社も片田舎といった感じのところにあるのですぐに着く。約三十分電車で揺られ辿り着いたのは、大きな霊園だった。

母、そして代々の博麗家が眠る墓は霊園の中でも奥の方にある。母さんが亡くなるまでは毎年一緒に来ていたが、一人で来るのは六回目。慣れないものだ。

最初に墓の周りを箒で軽く掃いて、雑草を抜いてしまう。隣のお墓の人はいつもこつちの分までやってってくれるようで、雑草は全然無い。ありがたいことだ。今度会つたら礼を言っておこう。

周りは綺麗になつたので、次は墓石本体を綺麗にする。綺麗な水を墓石にかけて、柔らかめのたわしで優しく洗う。汚れが取れて、いい感じだ。『博麗家先祖代々霊位』と刻まれた部分の汚れもしっかり落とし終了。地味に結構疲れるが、もう私しか博麗家

の人間はいないらしいので、墓石の管理は私の義務だ。

花立てに榊を入れたら、墓に水をかけてお洗米と塩を供える。正直こころ辺の意味は知らない。……そもそも家の神社に祀ってる神様も誰だかよくわかってないのだ。昔教えてもらった気がするのだが、すっかり忘れてしまった。

最後に二礼 二拍手 一礼で御墓参りは終了だ。

いつの間にか太陽は南に上っている。今頃主人公たちは鎬を削っているのだろう。

ヴィランの襲撃から生き残った一年生。

良いキャッチフレーズだ。今年の体育祭は一年に注目が集まる。だから別に二年生の今は出なくていいや、といった意味もあつて今年はいかなかった。最も一番の理由は

：

今日が母さんの命日だから、なのだが。



## 頁13

「ゆーかー!!」

大声で叫びながら壁を突き破って登場した人影。

空色の美しい髪をツーサイドアップにして、緑のキヤスケツトを被ったその小さな人影は何処からどう見ても私の親友の推しキャラ 河城にとりで、その中身は……

「誰が聞いているかわかんないんだから霊夢って呼びなさい、芽衣」

「やだ」

私の親友であり、私に東方を教えた張本人である 河野 芽衣だった。

こいつ、芽衣こと「にとり」との出会いはず度一年前に遡る。

一年前の体育祭、障害物競走が始まってすぐにとりは自身の発明品を使用して私含めた全員をリタイア寸前まで追い込んだ。何をやったかというところ……超強力睡眠ガスをばら撒いた。それアリか？ と言いたいところだが、ギリギリ許可レベルだったらしい。

幸い私は博麗の勤的な何かですぐに察知できたが、参加したうちの半分が開始30秒でリタイア状態。障害物競走は波乱の幕開けの中、スタートした。

その後もにとりは妨害をしながらトップを独走し、会場は諦めたような雰囲気包まれた。が、全国放送でボロ負けするわけにはいかないということで、私は他の参加者を囿にして本気でにとりを追い掛けた。素の身体能力は高い方だが、結構キツかったのを覚えてる。そしてゴールギリギリでにとりと並んだ私はある意味不可能弾幕といえる弾幕を放ち、一位の座を得た。言葉にすれば簡単だが、普通に大変だった。

絶対避けられないだろうという弾幕も三次的な動きで避けるわ、何処から出したのか巨大ロボを出現させたりと本当に後半は意味不明だった。

必殺技でもある夢想天生も一度だけだが使ってしまったし、恐らくここ数年では一番疲れ闘いだっただと言えらるだろう。

「優、じゃなくて霊夢？話聞いているの？」

「聞いているわ」

肩を揺さぶられた私は、一度過去の思い出を振り返るのをやめて話に集中する。

「そりゃ良かった。話に戻るよ。これが原作じゃ通信機器にもなつてた幻想郷の便利アイテム 陰陽玉ね」

そういうながらにとりは赤と白の陰陽太極図模様の球体を差し出してくる。

「ふーん」

「ちよつと！ 凄い頑張ったんだからもっと嬉しそうにしてよ！」

「アンタの場合楽しんでたでしょ」

「チツ、バレたか」

この世界に来る前、芽衣だった時はただのオタクだったがにとりになってからこいつは急に機械にハマったらしい。私も霊夢になってから縁側でお煎餅食べるのが日課になってしまったし、もしかしたら自分の体の本来の主の性格に似てしまったのかも知れない。ま、だからといって何か問題があるわけではないが。

ただ一つ問題があるとしたら、

「陰陽玉持つてポーズ決めて!!」

「いーやーだ!!」

「生霊夢が陰陽玉使ってる戦闘シーン見たいの!!」

内気だった性格が元氣っ子になったからか、やたら私が絡まれることだろうか。